

台湾先住民プユマにおける鳥名の音声記述と種同定

高田 三枝子・蛸 島 直

はじめに

本稿は、台湾先住民プユマ（ピヌユマヤン・卑南族）の1集落カサヴァカン村（建和村）の一人の話者が語る鳥名について、その音声記述と種同定を試みるものである。

民族生物学の研究において、地方名の収集とその同定は、重要不可欠の作業となるが、そこにはいくつかの困難が伴う。特に鳥類を対象とした場合、標本が得にくいことはもちろん、雌雄差や成長段階、季節等による外観の相違や変動が大きいというのに、「声はすれども姿は見えず」といった制約などから知識自体が不安定となりがちで、同定はより困難となる。こうして、鳥名については、同一民族であっても集落差が大きく、さらに同一集落であっても、少なからぬ個人差が存在することになる（蛸島 2018：3-4, 32-37）。

それゆえ、複数の話者から1つでも多くの鳥名を聞き取り、それらを集積・総合していくことが重要となるが、そこには、シノニムやホモニムが混在しうるし、思わぬ誤解が生じる可能性もある。一方で、一人の話者がどれだけの鳥名を知っているのかを把握しておくことも必要である。一個人のもつ知識の体系性も十分留意されるべきだからである。

蛸島は、文化人類学の立場からカサヴァカン村において民族動物学に関する調査を継続しており、鳥に関しては、複数の話者から約50の地方名を確認している。そうした中で、現在おそらくもっとも豊かな知識を有するのが、1943年生れの男性ハコ（哈古：陳文生氏）である。彼は、同村の頭目（首長）でもあり、伝統文化の維持に関

する自らの責任をしばしば口にしている。さらに、当人によれば、幼少期からいたずら者で、鳥を捕えることもよくあり、山に入っても、年配者に鳥の名をよく尋ねていたという。彼は、長じて彫刻家となり、その関係もあろうか、動物に対する観察眼には卓越したものがある。

蛸島は、同氏からこれまで38の鳥名を筆記しており、その一部については、片仮名とローマ字表記等を行ってきた（蛸島 2016, 2017, 2018）。

今回、正確な音声記述を期待し、2018年8月にそれらすべてを改めて同氏に発音してもらい、録音を行った。

本稿は、その音源に基づく、高田による音声の分析結果の報告と考察が中心になるが、種同定を行った蛸島は、その中間報告を受けて、自らが片仮名表記していたものとの乖離に大いに驚かされることになった。というのも、これまでの現地での話者たちとの会話において、蛸島は、自身の仮名表記に従って鳥名を発音してきたが、話者たちはその都度（少なくとも見かけ上違和感なく）認識してくれてきたからである。

「聞きなし」という言葉は、鳥の鳴き声について使用されるが、実は、ヒトがヒトの声についても、自分の予想に合わせて「聞きなし」を行っているという事実によって改めて気づかされた次第である。

ところで、プユマ語の「鳥」に相当するアヤム（*Hayam*）は、ニワトリやアヒルなどの家禽、そしてアヒル同様に趾（あしゆび）に水かきをもつ水禽を含まぬ一方、コウモリとムササビを含むことが注目される。中には、飛行する昆虫をこれに含める者もいるが、話者ハコはそうではないとい

う。農業高校出身の彼は、ニワトリやアヒルが鳥類であり、コウモリとムササビが哺乳類であることを知っているが、プユマ語話者としての彼は、プユマ語の *Hayam* が指してきたであろうものを尊重しているのである。

今回の録音と以下の記述は、プユマ語の *Hayam* として認識されるコウモリとムササビを含んでい。また、除外されるニワトリやアヒルについても参考のために対象に加えている。

以下、1)において、鳥名の同定と記載の方法について引き続き蛸島が述べ、2)と3)において、話者が発音した各鳥名の音声記述と考察を高田が行う。

1. 鳥名の同定と記載方法

鳥名の同定方法は、1) 話者と蛸島が現場で対象を視認しての確認、2) 話者と蛸島が現場で鳴き声を聴取しての確認、3) 複数のフィールドガイドの写真や挿絵を用いての聞き取り、4) 蛸島が撮影した写真を用いての聞き取り、5) 鳥の鳴き声を再生しての聞き取りの5方法であり、それらの併用によるクロスチェックを心がけた。

話者ハコとの間では、1)によって、コウライキジ・カワラバト・タイワンキジバト・カノコバト・ベニバト・アカモズ・タカサゴモズ・オウチュウ・ツバメ・リュウキュウツバメ・コシアカツバメ・クロガシラ・メジロ・スズメ・コシジロキンパラ・シマキンパラの10名称16種を聞き取り、2)については、テッケイ・タイワンゴシキドリ・タカサゴモズの3名称3種を確認している。3)については、林(2000)・張(1999)・蕭(2015)等を使用した。4)では、フィールドガイドとは異なるアングルの写真を示したり、画面上でサイズを実物に合わせるなどの工夫をし、情報を補強することができた。5)の音源は、同種であっても鳴き声に地域差があることに留意しつつも、吉野・山田・上田(2011)と上田(2012)による日本の野鳥のものを使用した。

ここで、調査方法について興味深かったことを反省を込めて述べておきたい。トビについては、林(2000)掲載の写真に対して、話者が挙げた名

称は、項目11の /CiLauLau/ であったが、後に、上田(2012)の録音によるトビの特徴的な鳴き声(地鳴き)に対し、即答したのは、項目9の /toravakan/ であった。ちなみに項目6のゴイサギ /kadarowa/ であるが、その鳴き声が死人の出る前兆として非常に嫌われている鳥で、その名を知らない者はない。ところが、多くの人々は、声を聞くのみで、姿を知らずにいる。彼らは皆、5)の作業によってそれをゴイサギの声と認めるのである。そんななかで、話者ハコは、写真だけからも、/kadarowa/ をゴイサギと同定する数少ない話者の一人である。

なお、以下の地方名40名称のうち、分類学上の種と1対1で対応するものが24名称、その他、複数種と対応するものが15名称を数える。項目12の /kivaLivaLi/ に至っては、ハヤブサ目のチョウゲンボウとスズメ目のヒバリ双方を指していることが注目される。

さらに、注意しておきたいのは、雄雌の名称を異にするという項目7のカムリワシ (/ŋaŋai turui/) である。話者によれば、/ŋaŋai/ が雄で /turui/ が雌である。昔話では、母親に見放された人間の兄妹がおり、兄は /ŋaŋai/ に、妹は /turui/ に転じたという。子守唄でも /ŋaŋai turui/ と歌われ、音声記述者の高田が合成語と見るとおり、ほぼ決まって、1語であるかのように連続して語られる(蛸島2017: 108-109)。

また、話者ハコは、項目17のアオバト (/murapunai/) を、項目16の集落内で見られる他のハトたち (/tutur/) と区別するが、文脈次第では、前者もまた /tutur/ の一種であり、/tutur/ と呼ぶうという。すなわち、これらの地方名には分類群 (taxon) の異なるものが含まれる上に、文脈次第で分類階級を変化させるものもある。鳥類の民俗分類の構造と原理にとって重大な問題であるが、それについては、機会を改めて検討したいと考える。

なお、本稿での鳥名の配列については、The eBird/Clements Checklist of Birds of the World: Version 2017に依拠した、Hsiao と Li の労作、*A Field Guide to the Birds of Taiwan* (2017) の記載順に

従っている。

ただし、同一地方名が、複数の属や科に、なかには、先の /kivaLivaLi/ のように複数目にまたがる複数種を指す場合もあるが、これらについては初出の鳥名の項で他の鳥名を併記することにする。

種同定できたものについては、和名・中国語名・学名・英語名の順に記載し、Hsiao & Li の掲載ページを、例えば94ページであれば、[HL94] のように付記することにした。同書当該ページには、Hsiao による解説があり、それぞれの次ページには Li による精緻な挿絵が掲載されている。なお、地方名はもちろん、和名・中国語名・学名・英語名のそれぞれにもシノニムが存在しがちであるが、そうした場合、中国語名以下は、Hsiao & Li に従った。

また、和名の表記については、張 (1999) に従ったが、未記載のものやその後の変更等もあり、複数のインターネット資料を参照し、最新の名称の記載を目指した。

2. 鳥名の音声記述

以下、話者が発音した各鳥名の音声記述を行う。記述の手法として、聴覚的な聞き取りに加え、音響分析の結果（主に音声波形、Spectrogram, formant plot）も取り入れて音声を記述する。ただし、音声記述者は現地での発話を直接見ていないため、口元を見れば明らかである要素（例えば、円唇性、両唇の接触など）については注意が必要である。

話者は各鳥名について2回ずつ発話している。以下の記述では各鳥名の発話1回目を(1)、2回目を(2)として音声を記述する。また、各発話に、音声記述者が気づいた点についてコメントを「*」として記す。また [HL44] 等は、先述のように、配列順を依拠したフィールドガイド Hsiao & Li (2017) の対応するページを示すものである。

なお記述内で「スペクトログラム」「フォルマント」といった音響分析上の術語を用いるが、スペクトログラムは図1の下段のよう

な分析画像であり、縦軸を周波数、横軸を時間としてエネルギーの強さを色（モノクロ表示では濃淡）で表すものである。フォルマントとは声道の形状に伴う共鳴特性によって強められる周波数帯域を言い、これは主にスペクトログラム上で確認する。フォルマントは低い帯域のものから順に第1フォルマント (F1)、第2フォルマント (F2)、第3フォルマント (F3)、…、と番号が振られる。例として図1に高田の日本語の母音 /i, e, a, o, u/ の音声波形とスペクトログラム、そしてフォルマントを示す。

各項目では、2回の発話から総合的に判断した音素表記を記すが、ここで示した音素については、あくまでこの資料内の音声から音素として立てられる可能性を推定したものであり、すべて音素として独立して立てられるものかどうかは今後の課題として残されていることに注意されたい。

特に、母音に関してはいくつかの母音音素を設定するかによって今後大きく解釈が変わる可能性がある。現時点で母音音素として /a, i, u, o/ を設定するが、中でも /o/ と /u/ の設定に関しては、再考の余地が大いにある。これらは実際にフォルマントを測定した場合に連続体を成し、重なりも多く、また隣村の方言を記述した曾 (2009) によれば /O/ と /E/ (どのような音声実態を指すのかは不明) は外来音であるとのことである (同 p. 5)。また、/a/ を立てる可能性がある。これはアクセントのある音節でもこの音声がはっきりと表れる項目があるからである (例えば、項目13「ヒク

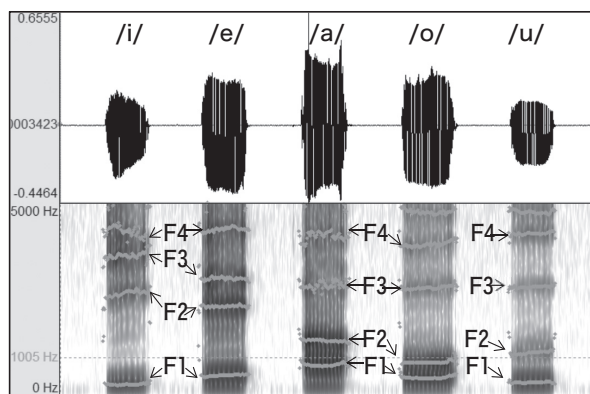


図1. 母音のF1~F4例（高田の日本語の5母音）

イナ」/kumkum/ の /u/ は /ə/ となる可能性がある)。

1) /puipui/

・ミヤマテッケイ (台湾山鷓鴣 *Arborophila crudigularis* Taiwan Partridge) [HL44]

(1) [puipui]

(2) [puipui]

* /ui/ をこの言語で連母音と捉えるか二重母音と捉えるか、また連母音の場合にそれぞれ音節を成すのかは現時点で断定はできないが、本稿の資料中、母音が連続する形で表れるのは、/ui/ の他、/ai, au, ou, iu/ であり、開口度に関して広→狭となるものがほとんどである。

2) /tikuLas/

・テッケイ (台湾竹鷓 *Bambusicola sonorivox* Taiwan Bamboo-Partridge) [HL44]

(1) [tikuʔaːs]

(2) [tikuʔaːs]

* 第3子音はふるえ音のような複数回のエネルギーの減衰ではなく、一度だけ瞬間的なエネルギーの減衰があると見える。また直前で3500Hz 付近のフォルマント (第3あるいは第4フォルマントにあたることが多い) が急激に下がっている (図2)。これは舌先を持ち上げることによる効果と考え、[ɿ] とした。

* 最終音節ピッチが高くなりアクセントが感じられると同時に母音伸長がわずかにある。

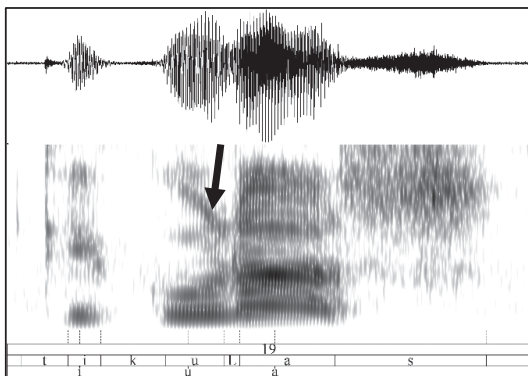


図2. 2(1) [tikuʔaːs]

[ɿ] の先行母音 [u] の F3 が低下している (矢印)。

3) /dapas/

・ミカドキジ (黒長尾雉 *Syrmaticus mikado* Mikado Pheasant,) [HL46]

・サンケイ (藍腹鵲 *Lophura swinhoii* Swinhoe's Pheasant) [HL46]

(1) [dapas]

(2) [dapas]

4) /tow'a/

・コウライキジ (環頸雉 *Phasianus colchicus* Ring-necked Pheasant) [HL46]

(1) [tɔwʔəː]

(2) [tɔwʔəː]

* 第2子音は、第1母音から第2母音への遷移上で咽頭の狭めを伴う (咽頭化している) 音のように聞こえる。スペクトログラム上でみると、第1母音 /o/ の定常部および最終母音と考えられる部分の間に第2フォルマントが著しく低下する部分が見られ、ここが咽頭化している部分として同定できる (図3)。ここではその音色なども考慮し軟口蓋接近音の咽頭化したものと捉えた。

* 第2母音は、日本語母語話者である記述者の耳には /e/ と聞こえるが、この項目の他に /e/ と分類すべき母音の出現した項目は19「ヒメフクロウ」のみである。しかし、どちらの項目においても、F1・F2・F3の値としては他の母音から明確に区別されず、またどちらも直前に咽頭化がありこれが母音に影響した可能性も考えることができる。従ってここではあえて /e/ を立てることはしない。

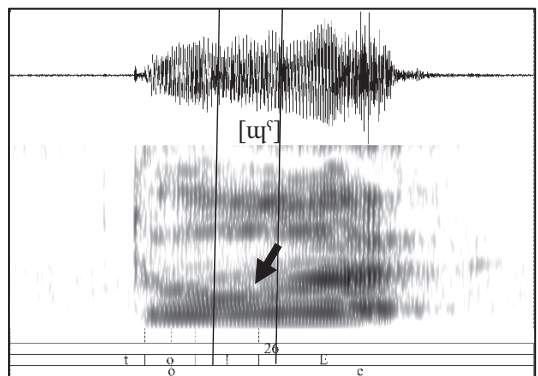


図3. 4(1) [tɔwʔəː]

縦線による囲み部分、前後に比べ F2 (矢印) が低下。

* 最終音節ピッチが高くなり、母音伸長あり。

5) /kadarowa/

・ゴイサギ (夜鷺 *Nycticorax nycticorax* Black-crowned night heron) [HL74]

(1) [kəzərowa]

(2) [kədərowa] /kadarowa/

* 第2子音が(1)では [z], (2)では [d] と異なる。また第3子音も、(1)では複数回の顫動が見られるふるえ音 [r] であるが、(2)では単顫動のたたき音 [r] である。同様の現象、つまり1回目と2回目で発音が大きく異なる現象が、項目10「タカ目の大型複数種」/harudi/でも生じている(そちらには図も提示)。全体に話者は2回目の方が丁寧に言っているように思われ、おそらく、発音としては2回目の方が標準的な発音なのであろう。

* 記述者の耳には、第1・第2母音は日本語の/a/に近い音に聞こえる。しかし第1, 第2母音は[a]としてはF1値が小さく(第1母音: 510Hz, 第2母音: 539Hz), F2値が大きい(第1母音: 1482Hz, 第2母音: 1541Hz)。このことから、第1・第2母音音声は[ə]で、音素/a/の異音であらうと考える。

* 語末に声門摩擦あるいは声門閉鎖音がついている可能性がある。1回目も2回目も日本語の仮名で「っ」と表現したくなるような、喉を閉める調音で発音し終える。ただし、この調音は他の項目でも出現すること、また本項目の発話後、同項目についての蛸島との会話の中で「『〜』(と)言う。」と引用の形で言うときに、この喉を閉めるような発音がないことから考えると、恐らく、単語形として含まれる音声ではなく、談話上の音声特徴(日本語話者も、特に単語単独発話ではよくこうした調音が現れる)と考え、ここでは記述に含めなかった。

6) /zavai/

・コサギ (小白鷺 *Egretta garzetta* Little Egret) [HL78]

・アマサギ (黄頭鷺 *Bubulcus ibis* Cattle Egret) [HL78]

・チュウサギ (中白鷺 *Ardea intermedia* Intermediate Egret) [HL78]

・ダイサギ (大白鷺 *Ardea alba* Great Egret) [HL80]

(1) [d̥zəvai]

(2) [d̥zavai]

* 第1子音はスペクトログラム上で破裂+摩擦の成分が見られ、破擦音である。

* 第2子音は唇歯摩擦音 [v] と聞こえる。

7) /ŋaŋai turui/

・カンムリワシ (大冠鷲 *Spilornis cheela* Crested serpent eagle) [HL90]

(1) [ŋəŋai t̥urui]

(2) [ŋaŋai turui] /ŋaŋai turui/

* 第1・第2子音は鼻音。

* 第4子音(2つ目アクセント単位の第2位子音)はふるえ音。

* 2つのアクセント単位からなり、このことから2つ以上の形態素からなる合成語であらうと考えられる。

* どちらのアクセント単位も最終音節にアクセントが置かれ、ピッチが高くなる。ただし、母音伸長があるのは前部のみ。前半の長母音は音韻的によどのように扱うか(母音連続として扱うか、長母音としての音素を認めるか(日本語のように)、あるいはアクセントや強調など他の要因によって生じた音声的な特徴とみなすか)によって音素表記が変わる。現在は最後の案を取っている。

8) /hazawisan/

・カンムリオオタカ (鳳頭蒼鷹 *Accipiter trivirgatus* Crested Goshawk) [HL94] ほかたカ目の小型複数種

(1) [haðawisan]

(2) [hazawisan]

* 第1子音は、(1)も(2)もスペクトログラム上で摩擦成分が見られ、聴覚的にも確認できる(図4)。

* (1)の第1母音は無声化している。

* 第2子音、スペクトログラム上で、(1)も(2)も、子音区間中の中高周波数域のエネルギーに途切れないため閉鎖音 [d] ではなく、また非周期性が目立つため有声舌歯摩擦音 [ð] と判断した。音素としては /z/ と区別されるか不明である。ここでは /z/ とする。

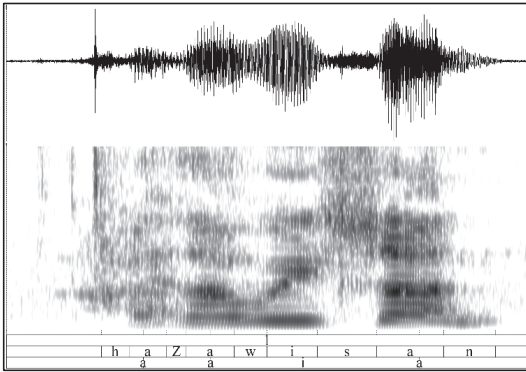


図4. 8(2) [haðawisan]

語頭、母音の前に摩擦音がある。(スパイク様のエネルギーは話者の音声のものではなく外部音(雑音))。

* 第3子音の [w] は、母音 [u] である可能性もあるが、母音連続をここにのみ認めるよりも、他箇所と合わせ子音と解釈した方が一貫性があると考え、子音として記述した。

9) /toravakan/

・トビ(黒鷲 *Milvus migrans* Black Kite) [HL100]

(1) [tɔrævakan]

(2) [tɔrævakan]

* 第2子音、わずかにスパイクが見られるため、[r]と判定した。

* 第3子音、摩擦成分はほとんど見えないので [w] の可能性もある。

10) /harudi/

・タカ目の大型複数種

(1) [harɔi]

(2) [harɔdi]

* 第1子音は、スペクトログラム上で摩擦成分が見られ、聴覚的にも確認できる。やや咽頭化しているように聞こえるが、ここでは [h] として記述する。

* 第2子音は、(1)ではエネルギーの途切れがないため歯茎接近音 [ɹ] とした。(2)ではふるえ音で表れた。

* 第2母音は、これを第2子音と区別して設定すべきかは、音声的には明確な区別がつきがたく微妙なところである。しかし(1)も(2)も、第2子音後、母音相当部分のエネルギーがわずかに大きく

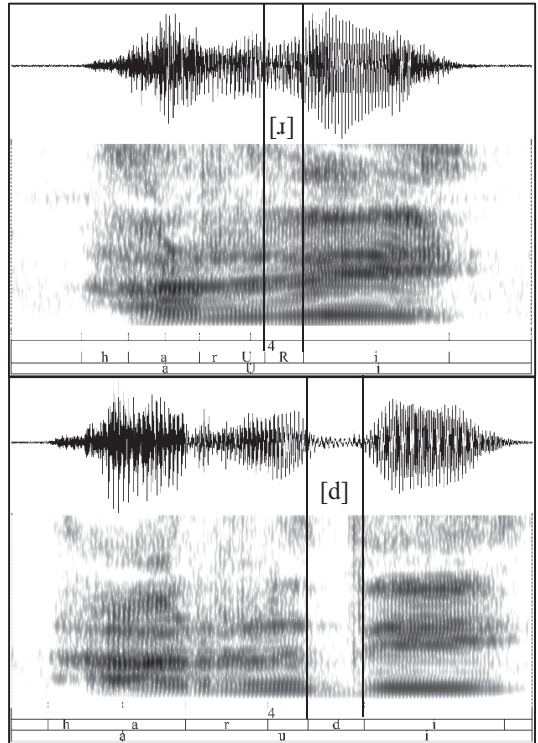


図5. 上: 10(1) [harɔi], 下: 10(2) [harɔdi]

(1)と(2)で第2, 第3子音の発音が大きく違う。

なること、またもし第2母音を認めないとしても、その長さや音の強さから一つの音節として成り立っているように見え、しかし子音一つのみからなる音節は認めがたいといったことから、母音の存在を認める方が良いと考え、ここでは母音として記述した。

* 第3子音は、(1)では /d/ の破裂調音がなく接近～摩擦音のようになっているが、(2)では破裂音として現れた(図5)。(2)の方が速度もゆっくりで丁寧な発音のよう。これ以外の項目の音声も含めて考えると、もしかすると話者の前歯が破裂調音しにくい状態(抜けている、など)で、破裂調音が摩擦～接近に代わってしまっている恐れがある。このことから省みて、特に本稿中有声歯(茎)音で記述しているものについては、今後他資料による再検討が必要かもしれない。

11) /CiLauLau/

・タカ目の中型複数種

(1) [t̪eɪˈt̪eɪt̪aɔ]

(2) [t̪eɪˈt̪eɪt̪aɔ]

* 第1子音は歯茎硬口蓋破擦音。なお調音位置について、後部歯茎 [j] より歯茎硬口蓋 [t̪]の方が近いと考える。本稿では以降、歯茎硬口蓋音として記述する。歯茎硬口蓋破擦音 [t̪e] は項目31「メジロ・メジロチメドリ」[t̪eɪ|t̪eɪ|jɔ]で、語頭だけでなく語中でも発音されている。一方、項目24「ヤمامスメ」では2回の発話中1回目は[eiːpaɪpaɪ]、2回目は[t̪eɪˈpaɪpaɪ]と摩擦音と破擦音が交替する。また、同様に摩擦音と破擦音の交替は、歯茎硬口蓋音以外でも見られ、項目20「カワセミ」では1回目は[ʔsəlɪzænon]、2回目は[səlɪzænun]と破擦音と摩擦音が交替している。以上のことから、破擦音は摩擦音の異音として現れ得ることを考え、音素としては同調音位置の摩擦音と区別しないこととする。しかしどちらが代表的異音かについては、本資料中では歯茎硬口蓋音では破擦音で出現する方が多い。

* 第1子音の調音位置は歯茎硬口蓋音だが、これは /i/ が後続する /s/ の口蓋化した異音である可能性がある。これを支持する根拠としてはプマ語のタマラカオ方言の記述をしている土田 (1980) で [j] は /s/ の異音として扱っているということがある。ただし、本稿の資料の歯茎硬口蓋音は、後続音が /i/ 以外の場合もある (項目19「ヒメフクロウ」[t̪eəʔsɪs])。従って本資料では、仮に、歯茎音とは別の音素として歯茎硬口蓋音を /C/ として設定する。

* 上記2つのコメントから、本稿では [s, t̪] に対応する /s/ と、[e, t̪e] に対応する /C/ を設定する。

* 第1母音は円唇化を伴った [y] のようにも聞こえるが、これはおそらく直後の第2子音のそり舌化の影響であると考え、ここでは [i] とする。

* 第2子音は第3フォルマントが下降し、一瞬エネルギーの途切れがあるため、[ɹ] とした。

12) /kivaLiLi/

・チョウゲンボウ (紅隼 *Falco tinnunculus* Eurasian Kestrel) [HL106]

・タイワンヒバリ (小雲雀 *Alauda gulgula* Oriental Skylark) [HL258]

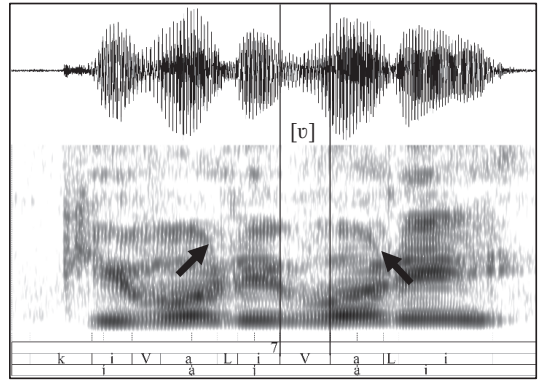


図6. 12(1) [k'iveɹivəɹi]

第3, 第6子音の直前で F3 が大きく下降している (矢印)。

(1) [k'iveɹivəɹi]

(2) [k'ivəɹivəɹi]

* 第2子音は、音声的には強い摩擦が見られず、接近音として実現している (図6)。しかし、ヴァリ *vali* は「風」の意、*ki* は「求める」の意で、風を求めてホバリングすることから命名されたとのことである (蛸島の指摘)。このことを踏まれば、少なくとも唇歯音であることが想起され、ここでは唇歯接近音 [v] として記述した。音素としては [v] と [v] を弁別しないのであれば (おそらくしないであろうと考える) /v/ でよいと考え、/v/ としておく。

* 第3子音はふるえ音のような複数回のエネルギーの減衰ではなく、一度だけ瞬間的なエネルギーの減衰があると見える。また直前で3500Hz 付近のフォルマント (第3あるいは第4フォルマントにあたることが多い) が急激に下がっている (図6)。これらのことから [ɹ] とした。

13) /kumkum/

・ヒクイナ (緋秧雞 *Zapornia fusca* Ruddy-breasted Crane) [HL110]

(1) [kəm̩kəm̩]

(2) [kəm̩kəm̩]

* 最終音節ピッチが高くなりアクセントが感じられる。母音伸長なし。アクセントの置かれた最終音節の母音でも、聴覚的にも音響的にも [a] と捉えられる音声である。本項目より前では [a] は

/a/, /o/ また /u/ の異音と捉えられるケースが多いので、ここでも聴覚的に最も近い /u/ として解釈した。ただし本項目の発話ではアクセントの置かれない第1音節の母音と音質が変わらず、/ə/ が別音素として立てられる可能性もある。

14) /kuLakuLa/

・シロハラクイナ (白腹秧雞 *Amaurornis phoenicurus* White-breasted Waterhen) [HL114]

(1) [kə|akə|a]

(2) [kə|akə|a] /kuLakuLa/

* 第2子音は、エネルギーの減衰があまりなく、直前で第3フォルマントが急激に下がるため、そり舌音であると考え、[l] とした。

15) /dazamuŋ/

・ミフズラ (棕三趾鶉 *Turnix suscitator* Barred Buttonquai) [HL164]

(1) [dəðəmuŋ]

(2) [dəðəmuŋ] /dazamuŋ/

* 同じ鳥を指す名前として、他方言で、za-zemeng (土田 1980, 曾 2009) の記述がある。本稿資料の音声では2回とも、第1子音は、破裂がしっかりあり有声破裂音 [d] である (図7)。

* 第2子音は第2フォルマントまで周期性が観察され、接近音か摩擦音か迷うところ (図7)。

* 後の音節に向かってだんだんピッチが高くなる。

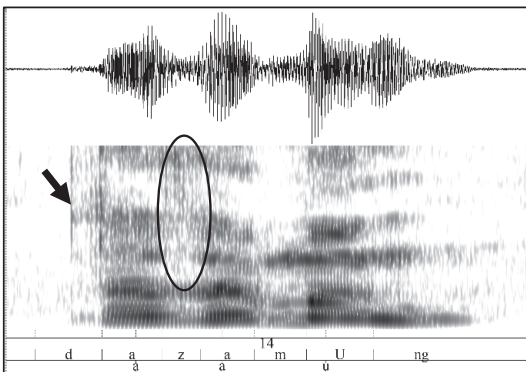


図7. 15(1) [dəðəmuŋ]

第1子音は破裂があり (矢印箇所)、第2子音には摩擦がある (囲み箇所)。

16) /tutur/

・カワラバト (野鴿 *Columba livia* Rock Dove)

[HL196]

・タイワンキジバト (金背鳩 *Streptopelia orientalis* Oriental Turtle-Dove) [HL198]

・カノコバト (珠頸班鳩 *Streptopelia chinensis* Spotted Dove) [HL198]

・ベニバト (紅鳩 *Streptopelia tranquebarica* Red Collared-Dove) [HL198]

(1) [totoʀ]

(2) [totoʀ] /tutur/

* 語末子音はスペクトログラム上ではっきりとふるえ音の顫動部が確認できる。

* 最終音節ピッチが高くなり、母音伸長あり。

17) /marapunai/ (/punapunai/)

17-1. /marapunai/

・アオバト (緑鳩 *Treron sieboldii* White-bellied pigeon) [HL202]

(1) [məɾəpunai]

* 次の17-2のシノニム形の発話の関係で、1回目の発話しかはっきり聞き取れないため、ここでは(2)は省略する。

* 第2子音はそり舌音ではない。瞬間的なエネルギーの減衰があるため [r] とした。

* 次の17-2で示す /punapunai/ は、複数の村民が /murapunai/ のシノニムとして使用している名称であるという。本稿の資料の話者は、アオバトに17-1で示す語形と17-2で示す語形の両語形があることを知っているが、前者が本当の名称と語っている (蛸島指摘)。

17-2. /punapunai/

・アオバト (緑鳩 *Treron sieboldii* White-bellied pigeon) [HL202]

(1) [punəpunai]

* 1回目の発話のあと、調査者と重なる発話が3回ほどあり、その後、同席していた話者の妻の発話が1回あり (その発話は [pənəpunai] と聞こえる。話者と発話の重なる部分あり)、その後、当該の発話 (/punapunai/, 17のシノニム形) の発話を話者単独でしている。

18) /haCTow/

・フクロウ目の総称

(1) [haɕtəu]

(2) [hæʧəu]

* 第1子音は、やはりスペクトログラム上で摩擦成分が見られ、聴覚的にも確認できる。やや咽頭化しているように聞こえるが、ここでは [h] として記述する。

* 第2子音は、特に(2)で摩擦がよく観察できるが、聴覚的に単に歯茎音 [s] というより硬口蓋化していると聞こえる。

* 第3子音はそり舌音と思われる。先行子音 [e] は聴覚的に少しもった音がするのはこれに影響を受けてのことと考えられる。また後続母音 [ou] も、これに影響を受けて母音の連続と聞こえている (本当は /u/ などの短母音) 可能性もある。

19) /CoHis/

・ヒメフクロウ (鵂鶒 *Glaucidium brodiei*
Collared Owl) [HL216]

(1) [t̪eʰs̪is]

(2) [t̪eʰs̪is]

* 第2子音は無声咽頭摩擦音と聞こえるが、スペクトログラム上では有声音、さらに言えば摩擦もはっきり見えず、母音が咽頭化したものようにも見える。プユマ語タマラカオ方言の記述をしている土田 (1980) では無声咽頭摩擦音が母音間で有声化するという記述があり (同 p. 190), 本資料でも同じ現象が起きている可能性を考え、音素としては /H/ とする。ただし、この仮定についてはこの音声 genuinely 無声咽頭摩擦音の有声化したものと言えるのか、あるいは咽頭化した母音か、など、さらに検討が必要である。なおその際にはこの言語で母音連続を許すか否かということも含めて考える必要がある。

* 第2母音, [ei] のように聞こえるが、本方言で [e] は他にほとんど観察されず、またこの音声もフォルマント値は [i] に近いこと、恐らくこの聴覚印象は前の咽頭音の影響が考えられることから, [i] そして /i/ であると考えられる。

20) /salizanun/

・カワセミ (普通翠鳥 *Alcedo atthis* Common
Kingfisher) [HL224]

(1) [ts̪ælizænən]

(2) [s̪ælizænən]

* 第1子音は, (1)では破裂と摩擦の成分が見られ、破擦音である。しかし(2)では破裂がなく、摩擦音である。

21) /tukunun/

・セグロコゲラ (小啄木 *Dendrocopos canicapillus*
Grey-capped Woodpecker) [HL230]

・台湾ゴシキドリ (臺灣擬啄木 *Psilopogon
nuchalis* Taiwan Barbet) [HL232]

(1) [t̪okən̪ʊn]

(2) [t̪okən̪ʊn]

* 最終音節ピッチが高くなり、同時に母音伸長あり。

22) /hariasan/

・タカサゴモズ (棕背伯勞 *Lanius schach*
Long-tailed Shrike) [HL242]

(1) [həriæθan]

(2) [hariæθan]

* 第1子音は、スペクトログラム上で摩擦成分が見られ、聴覚的にも確認できる。やや咽頭化している (咽頭の狭めがある) ようにも聞こえるが、ここでは [h] として記述する。

* 第2子音は, (1)も(2)も、スペクトログラム上でエネルギーの瞬間的な切れ目が見られるため、はじき音と考えた。

* 第3子音は, (1)も(2)も、スペクトログラム上で摩擦が確認でき、また聴覚的に [s] より柔らかい音質であるためこのようにした。ただし、この話者の調音は全体に歯茎音の閉鎖性が弱い可能性があり、もしかするとこれは [t] の可能性もある。音素としては /s/ とする。

23) /takiukiu/

・オウチュウ (大巻尾 *Dicrurus macrocercus*
Black Drongo) [HL246]

・ヒメオウチュウ (小巻尾 *Dicrurus aeneus*
Bronzed Drongo) [HL246]

(1) [tak̪i̯ok̪i̯u]

(2) [t̪ok̪i̯ok̪i̯u] /takiukiu/

* 後の音節に向かってだんだんピッチが高くなる。

24) /Cipaipai/

・ヤمامスメ (台湾藍鶲 *Urocissa caerulea*
Taiwan Blue-Magpie) [HL250]

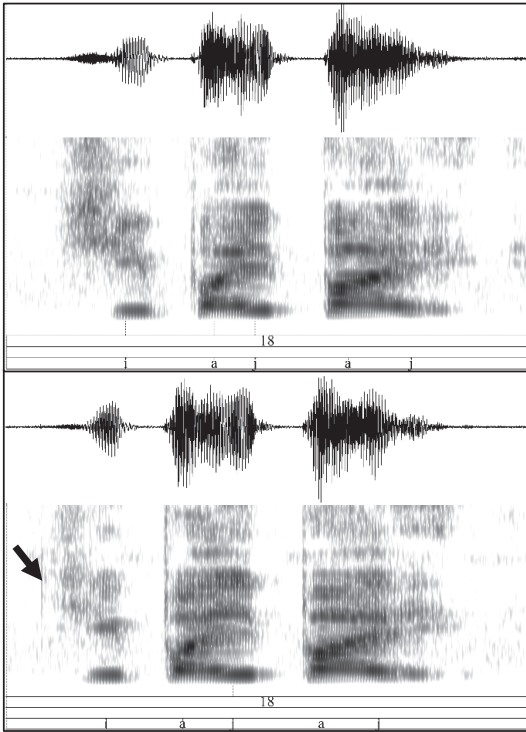


図8. 上: 24(1) [ei:paipai], 下: 24(2) [tei:paipai]

第1子音, 1回目(上図)には破裂がなく, 2回目(下図)には破裂がある(矢印)。

- (1) [ei:paipai]
 (2) [tei:paipai]

* 第1子音は, (1)では摩擦音, (2)では破擦音である(図8)。

* 第1母音は, 長母音のようにも聞こえる。しかし実際は他の鳥名発話の第1母音と比べて持続時間が長いわけではない。この現象は, おそらく, 表記者の母語(日本語)の影響ではないかと考えられる。すなわち日本語では /ai/ 連母音を2拍と数え2拍分の長さを想定するが, それに比してこの発話の /ai/ を聞き, さらにそれに比して第1母音を捉えるため, 相対的に長く感じる結果になっていると考えられる。

* 最終音節ピッチが高くなりアクセントが感じられる。母音伸長をわずかに感じる。

25) /turakak/

・タイワンオナガドリ(樹鵲 *Dendrocitta formosae* Grey Treepie) [HL250]

- (1) [təɾəkək]
 (2) [təɾakək] /turakak/

* 第2母音は(1)と(2)でだいぶ違う発音。

* 最終音節ピッチが高くなり, 同時に母音伸長もある。

26) /muaLuŋ/

・アカモズ(紅尾伯勞 *Lanius cristatus* Brown Shrike) [HL240]

- (1) [muəɾŋ]
 (2) [muə[ŋ]

* 第1母音, [uə] という狭母音→広母音という音連続が初めて見られる。これを連母音とすべきか重母音としてとらえるべきか, また1音節と捉えるべきか2音節と捉えるべきか, 現時点では断定できない。

27) /wauwa/

・ハシブトガラス(巨嘴鴉 *Corvus macrorhynchos* Large-billed Crow) [HL254]

- (1) [w^əouw^əa]
 (2) [w^əauw^əa]

* 第3子音の [w^ə] は第1母音 [ou] の後半部の [u] に比べて第2フォルマントがさらに下がり(図9), 区別される。第2フォルマントが下がるということは咽頭部の狭窄が強くなったと考えられるため咽頭化の記号 [ʷ] を付した。ただし, [w^ə] はおそらく [u] との音節境界をはっきりさせる意図で音色を変えるために調音されているもので, 異音として考えてよいのではないと思われる。

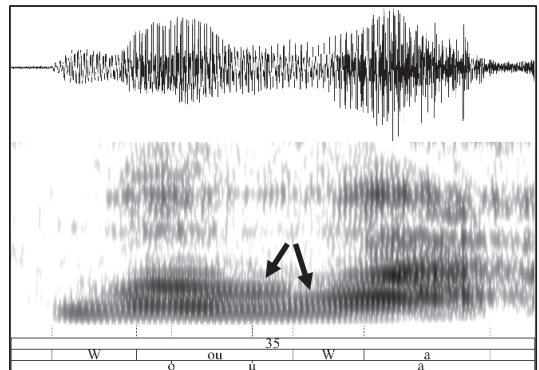


図9. 27(1) [w^əouw^əa]

母音後半部 [w] と子音 [w] の間で F2 が下がる (矢印)。

* (2)では第1母音前半部は [a] に近くなった。聴覚的には(1)も /au/ にも聞こえ、音素表記は /au/ とした。

28) /vaLisaisai/

- ・ツバメ (家燕 *Hirundo rustica* Barn Swallow) [HL262]
- ・リュウキュウツバメ (洋燕 *Hirundo tahitica* Pacific swallow) [HL262]
- ・コシアカツバメ (赤腰燕 *Hirundo daurica* Red-rumped swallow) [HL262]

(1) [va]ʃisaisai]

(2) [vaʃisaisai]

* 第1子音、音声としては摩擦成分が見られず接近音である。しかし同鳥の鳥名はタマラカオ方言を記述した土田 (1980) では veRaRisay と記述されており、また項目12「チョウゲンボウ」で述べたように、ヴァリ vali は風の意ということであるから、ここも同じ形態素 (/vaLi/ で風の意) であると考えるのが妥当であろう。

* 第2子音、(1)も(2)も (3500Hz 付近の) 第3・第4フォルマントの下降が先行する。(1)ではエネルギーは持続するが調音のスパイクも見えるため [ʃ] とし、(2)ではエネルギーの空白も見えるので [tʃ] とした。

29) /CiHouL/

- ・クロガシラ (烏頭翁 *Pycnonotus taivanus* Styan's Bulbul) [HL266]

(1) [tʃei]ʃooʃ]

(2) [tʃei]ʃooʃ]

* 第1子音は無声破擦音で、調音位置は歯茎硬口蓋である。

* 第2子音は、有声摩擦音であるが、聴覚的には無声音にも聞こえる。タマラカオ方言の記述では無声咽頭摩擦音が母音間で有声化するという記述があり (土田 1980)、本資料でもおそらく同じ現象が起きていると考え、音素としては /H/ とする。

* 最終音節ピッチが高くなり、母音伸長わずかに感じる。

30) /tikʰtikan/

- ・マミハウチワドリ (褐頭鷓鴣 *Prinia inornata* Plain Prinia, or Tawny-flanked Prinia) [HL294]

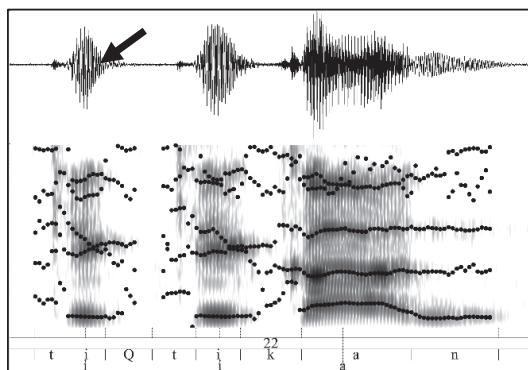


図10. 30(1) [tikʰtikan]

分かりやすくフォルマントを連続点で表示している。第1母音の出渡り部で、F2とF3が合流している (矢印)。

(1) [tikʰtikan]

(2) [tikʰtikan] /tikʰtikan/

* 第2子音 (第1音節末子音) は、声門閉鎖音ではなく解放のない [k] である。先行母音 (第1母音) の出渡り部で第2・第3フォルマントが合流するように遷移していることから、口腔内の閉鎖が起こっていると考えられる (図10)。

31) /CiLiCiLiu/

- ・メジロ (暗緑繡眼 *Zosterops japonicas* Japanese White-eye) [HL300]
- ・メジロチメドリ (繡眼畫眉 *Alcippe morrisonia* Grey-cheeked Fulvetta) [HL304]

(1) [tʃei]ʃiʃiʃi]

(2) [tʃei]ʃiʃiʃi]

* 第1・第3子音は破擦音。

* 第1・第3母音は円唇化を伴った [y] のようにも聞こえるが、これはおそらく直後の第2・第4子音のそり舌化の影響であると考え、ここでは [i] とする。

32) /Cirakop/

- ・タケドリ (台湾棕噪眉 *Ianthocincla poecilorhyncha* Rusty Laughingthrush) [HL306]

(1) [tʃei]rækop]

(2) [tʃei]rækop]

33) /saLikasakat/

- ・イソヒヨドリ (藍磯鶇 *Monticola solitaries* Blue Rock-Thrush) [HL338]

(1) [sɛ̃jikæθækæt]

(2) [sɛ̃jikæəsækæt]

* 第1子音と第4子音はともに無声摩擦音だが、第1子音が高周波域に摩擦成分があり[s]と聞こえるのに対し、第4子音は低周波域まで広がり聴覚的にも柔らかく[θ]として記述した。

* 第2子音は、第3フォルマントの下降があり、1回目はスパイクがはっきり見えないが、2回目では比較的よく見えるので、それぞれ [j] と [ɟ] とした。

* 語末子音は、[t] と聞こえ、現時点で音素も単に /t/ としておく。ただしプユマ語の他方言（タマラカオ方言）について記述した土田（1980）によれば、その方言では [t] と [ɟ] が音韻的に区別され（前者を /t/, 後者を /θ/ とする）、「他の閉鎖音が音節末で破裂しない（un-released）のに対し、/t/ だけには軽い破裂が聞かれる（released）そのため /t/ と /t/ の対立はまぎれることがない。」とある。また一方で、黄美金（2000）『卑南語参考語法』p. 45の「音韻規則」の記述（これも本稿の資料の方言とは遠い方言（プユマ方言）についての記述）によれば、/d/ を含む有声破裂音は語末で無声音となることが述べられている。

34) /sasaLi/

・スズメ（麻雀 *Passer montanus* Eurasian Tree Sparrow）[HL392]

(1) [səsəɽi]

(2) [səsəɽi]

* 第1、第2母音は音素として /a/ か /o/ か聴覚的には判定できない。ここでは仮に /a/ とした。

* 第3子音は、第3フォルマントの下降があり、エネルギーの減衰が瞬間的にはっきり表れているので [ɟ] とした。

35) /torin/

・コシジロキンバラ（白腰文鳥 *Lonchura striata* White-rumped Munia）[HL394]

・シマキンバラ（班文鳥 *Lonchura punctulata* Scaly-breasted Munia）[HL394]

(1) [tɔriːn]

(2) [tɔriːn]

* 第2子音、はじき音が聞かれるので [r] とした。

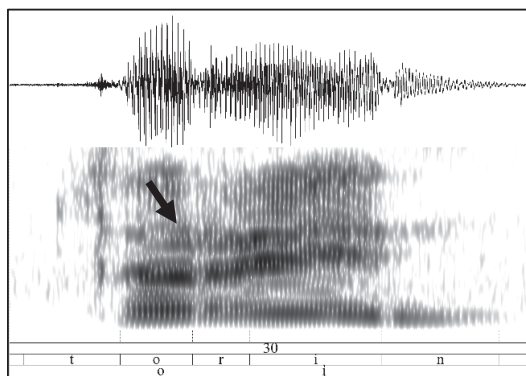


図11. 35(2) [tɔriːn]

第2母音の出渡り部でF3の低下がない（矢印）。

第3（第4）フォルマントの下降もなく（図11）、両者ともそり舌の調音は聞かれない。本項目のこれらの流音音声とこれ以外の項目の流音音声（項目12「チョウゲンボウ」の図6など参照）を総合して考えると、本資料の方言において「そり舌 vs 非そり舌」は音韻的に区別されるようである。ただし「弾き vs 非弾き」は音韻的に区別されるかどうか、現時点では不明である。音素としてはそり舌音系は /L/, 非そり舌音は弾き音・ふるえ音は /t/, そして側面接近音 /l/ を立てる。

* 最終音節ピッチが高くなりアクセントが感じられる。母音伸長あり。

36) /dakazakau/

・伝説上の怪鳥（話者によれば孔雀の姿をした巨大な鳥だという）

・インドクジャク（藍孔雀 *Pavo cristatus* Indian Peafowl）[HL396]：動物園やテレビで見る。

(1) [dɔɣəðəkau]

(2) [dɔkəðəkau]

* プユマ語のタマラカオ方言を記述した土田（1980）の記述では、「クジャク」は /zakazakau/。しかしこの話者の発音では第1子音は [z] ではなく [d]。これと並列的な現象、すなわち土田（1980）や曾（2009）で語頭の /z/ とされている音が、本資料では [d] で実現するという現象は項目15の発音でも共通する。語頭で破裂音であることはスペクトログラム上ははっきりと確認できる。破裂の有無のスペクトログラム上での見え方につ

いては項目15の図7参照のこと。

* 第2子音は、(1)では半有声化している。(2)の方が第2子音 /k/ は無声がはっきりしている。

* 第3子音は破裂がなく、また voice bar だけでなく中高音域にエネルギーもあり、聴覚的には [z] の粗擦性が弱くより [d] に近く聞こえるので、有声舌歯摩擦音 [ð] として記述した。

37) /wiu/

・ニワトリ (鶏 *Gallus gallus domesticus* Chicken)

(1) [oiu]

(2) [oiu]

* 語のピッチパターンとして、(1)では最終母音でしっかり下がり LHL のパターンを取ったが、2回目は語末であり下がらず、LHであった。

38) /maivai/

・アヒル (鴨子 *Anas platyrhynchos var.domesticus* Domestic duck)

(1) [mæivai]

(2) [maivai]

* 第2子音部で摩擦のエネルギーらしきものが続くため摩擦音とした。

* 最終音節ピッチが高くなりアクセントが感じられる。母音伸長なし。

39) /lapiC/

・コウモリの総称

(1) [lapit^h]

(2) [lapit^h]

* 第1子音はそり舌ではない。また弾きがないので [l] である。音素としては /l/ とする。

* 第2, 第3子音は閉鎖区間がやや長く聞こえる。

* 最終子音は円唇化しているように聞こえる。

40) /Lava/

・ムササビの総称

(1) [lava]

(2) [lava]

3. 考察

以上、話者の鳥名の発音を音声表記し、またそこから音素表記も試みてきた。この全項目の記述を通していくつか考えるべき点が見いだされた。

(1) 母音連続

広母音→狭母音, 前舌母音→後舌母音の方向での並びは間違いなく見られるが、その逆は二つしかない (項目22「タカサゴモズ」/hariasan/ の /ia/ と項目26「アカモズ」/muaLuŋ/ の /ua/)。音節境界や形態素境界の可能性や後続のそり舌音の影響など、他の解釈の可能性もあり、今後他の資料も含め注目すべき点である。

(2) 流音の音素

音韻的に対立する音として、少なくとも、そり舌音と非そり舌音の区別がありそうである。曾 (2009) では流音に3音素 (「顫音 r」 「閃音 l」 「邊擦音 lr」とあるが具体的な音は不明) あることを指摘しており、土田 (1980) では歯茎側面音、そり舌はじき音、有声ふるえ音の3音素を認めている。本稿の資料では歯茎側面音 [l] と、ふるえ音 [r] (その一実現形としてはじき音 [r] も含められるだろう) はそれほどはっきり区別されていないように見えたが、これも今後より詳細に検討する必要がある。本稿中では音素表記においてそり舌音系を /L/, 非そり舌音系を /l/ と /l/ で記述した。

(3) 破擦音と摩擦音の対立

破擦音と摩擦音は自由に交替する異音の関係であると見られる。例えば項目20「カワセミ」/salizanun/ は第1子音は一回目は破擦音 [ts], 二回目は摩擦音 [s] で発音している。また項目25「ヤマムスメ」/Cipaipai/ の第1子音は一回目は摩擦音 [e], 二回目は破擦音 [tɕ] で発音している。次の(4)とも関連し、本稿では、歯茎硬口蓋摩擦音および破擦音について、/C/ という音素を立てている。

(4) 歯茎音と歯茎硬口蓋音の関係

歯茎硬口蓋音の出現環境のほとんどが /i/ が後続する環境であり、前舌狭母音 /i/ による硬口蓋化が起きている、すなわち歯茎硬口蓋音は歯茎音の条件異音であるとも考えることも可能である。しかし、一部、/i/ ではない母音が後続する例が見られ (項目19「ヒメフクロウ」[tɕəŋis] は [ə] が後続)、これをどう解釈するかが問題になる。一つの可能性としては、日本語の拗音における子音解釈と同じように、/j/ が介在すると考え、あくま

で条件異音として扱う方法もあるが、本稿のように別音素として設定する可能性もある。

(5) 形態素末音節のアクセント

本稿の全項目に共通して、形態素の最終音節にアクセントが置かれていた。アクセントはピッチの高まりと、母音の伸長によって実現する。ただし、ピッチの高まりは全項目で観察されたが、母音の伸長は観察される場合とされない場合があり(またその程度も様々で)、アクセントの実現に必須の要素ではなさそうである。

これらの点を含め、音素の設定についてはさらに検討が必要である。

謝辞

本稿の作成に際しては、カサヴァカン村の頭目でもある話者のハコ(哈古:陳文生)氏に多大な協力をいただいた。心より感謝申し上げる次第である。

引用文献

張萬福 1999 『増訂版 臺灣鳥類彩色図鑑』 中台科学技術出版社

蕭木吉 2015 『台湾山野之鳥』 台北市野鳥学会
Hsiao, Mu-Chi (Author) and Li, Cheng-Lin (Illustrator)
2017 *A Field Guide to the Birds of Taiwan*. Wild Bird Society of Taipei.

黄美金 2000 『卑南語参考語法』 遠流出版

林英典 2000 『発現台湾野鳥』 晨星出版

曾建次編 2009 『卑南族簡易字典(石生語系)』 天主教会台湾主教团原住民牧靈委員会

蛸島直 2016 「プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論」日本順益台湾原住民研究会(編)『台湾原住民研究』20 pp. 29-72

蛸島直 2017 「プユマにおける人間起源動物譚」『台湾原住民研究』21 pp. 80-117

蛸島直 2018 「プユマの古い鳥をめぐる知識の多様性と変化」『台湾原住民研究』22 pp. 3-51

土田滋 1980 「プユマ語(タマラカオ方言)語彙一付・語法概説およびテキスト」黒潮文化の会(編)『黒潮の民族・文化・言語』角川書店 pp. 183-307

上田秀雄録音 2012 『日本の鳥声250選シール集』O&S

吉野俊幸・山田智子・上田秀雄 2011 『新ヤマケイポケットガイド野鳥』(電子辞書版) 山と溪谷社